

## 2025年度第3四半期決算説明会 質疑応答

- 開催日：2026年2月10日（火）
- 出席者：執行役員 財務部長 大嶋 裕美

以下、決算説明会の主な Q&A のテキストです。内容はご理解いただきやすいよう、部分的に加筆・修正しています。なお、文中にてセグメント略称を使用しています。

エネ：資源・エネルギー・環境

社基：社会基盤

産汎：産業システム・汎用機械

空：航空・宇宙・防衛

### <質問者 1>

Q： 3QにおけるPW1100Gの返金負債の為替換算の変動について、3Qの3ヶ月間で約44億円のマイナスがあったと推測しているが、これを戻すと空の3Q利益は200億円強になる。1Q・2Qでは、250億円～300億円程度あったので、3Qは少ない気もする。新製エンジンの増加や、プログラム関連費用、整備費用が3Qは少し大きめだったりが、1Q・2Qからの変化としてあるか？

A： ご理解のとおり。新製エンジンの増加と整備費用の負担が少し重くなっている。整備費用の負担が重くなっているのは、お客さまサポートという観点から今は部品を整備に振り向けていることによるものであり、中期的にみて、全体の収益最適化の方向に向かって通常の軌道に戻っている動きと評価している。

Q： 通期計画は据え置きと思うが、空の4Q営業利益は計算上483億円になる。スペアパーツの増加など、4Qで利益が回復すると見ている背景も教えてほしい。

A： 4Qは、防衛の売上増が続いていく。3Qまでは固定費負担が重い状況であるが、防衛の売上・利益貢献は4Qで大きくなっていく。加えて、民間エンジンのアフターマーケット事業でも、積み増しがある。引き算されると少しチャレンジングに見えるかもしれないが、全体として達成できると考えている。

Q： 空のスペアパーツ売上について。アフターマーケット事業の資料では、従来あった「CAGR20%」の記載がなくなっているが、航空全体や民間エンジンの成長見通しに変化があったのか？来期もグロスの伸び（整備費用相殺前）は年率平均成長率20%という見方で変わっていないか？

A： 大きな見方の変化はない。マーケットの環境も変わっておらず、そこは引き続き、堅調に推移していると考えている。

### <質問者 2>

Q： 空のスペアパーツ費用について。新製エンジンのマイナス効果はこれまで言及していた線なのか？スペアパーツ整備費用の負担はいつまで続くか？

A： 整備費用について、お客様サポートの観点から、部品を整備に振り向けている。そのため、当初想定より

前倒しで発生している。これまで、3年ほど影響が続く可能性があるとお伝えしてきた。全体の状況を見極めなければいけないが、少し前倒しになってきているとも感じている。一方、新製エンジンは、部品を整備に振り向けているため、台数が少し減る可能性があり、短期的には利益を押し上げる効果も見込まれる。

Q： 基本的にこの空の3Qの仕上がりは、おおむねインラインと考えてよいか？

A： ご理解のとおり。民間エンジンの新製エンジンとアフターマーケットの中での、入り繰りはあるかもしれないが、年度見通しは全体では変わっていない。

Q： 来年度、井手社長が率いる体制で、5月に新中計の方向感を示していただけるということですか？

A： ご理解のとおり。本日発表させていただいた経営体制で、変わらずにやっていきたい。

<質問者 3>

Q： 空以外の4Qの考え方について。例えば、エネでは、3Q累計を通期計画から差し引くと、4Qで34億円、営業利益率で3%となり、保守的に見ているのではないかと思う。一方で、社基は、3Q累計で▲7億円、4Qで差し引くと47億円の黒字見通し、利益率は21%となる。利益見通しの考え方は？

A： これらのセグメントで共通している特徴として、公共工事が多く、4Qに利益とキャッシュが積み上がってくるという構成になっており、見通しは達成できると考えている。

Q： アフターマーケットの主要KPIであるスペアパーツの伸び率に関し、昨今のモノ不足を背景とした需要環境の変化について、来年度も20%成長ということに対して、変化の兆しがあるか？

A： 全体のマーケットのトレンドについて、我々の見方は大きく変わっていない。四半期単位で見ると、PW1100Gを除いたところで少し下がっているが、それは4Qに寄っているということで、全体像としてはあまり変わらない。

<質問者 4>

Q： 事業構造改革について、パーキング事業を住友重機械から購入する発表があった。パーキング事業の規模は小さいと思うが、なぜ買収するのか？

A： 中核事業の中でもライトアセットで、しっかりとキャッシュが稼げるものについては、利益という観点での成長を考えていきたい。IHIはタワー型、二・多段式の機械式駐車場においてトップ企業であり、住友重機械は地下式駐車場で非常にシェアが高い。トップシェアを組み合わせることで、LCBを拡大させていく。

Q： 今年度のキャッシュフローの見通しが1,000億円ある中で、産汎やエネでも、欠けている分野について、今後、事業を買うことは増えていくか？

A： 空や、エネの原子力・アンモニア分野に優先的に投資をしていく考えに変わりはない。中核事業で、今回のようなお話があった場合、収益性、資本効率を守った上で、個別に1つ1つ検討していく。

Q： エネの受注を引き上げ、利益を下げているが、来年に向けて、受注の継続性をどのように考えているか？

A： 現在、来年度の計画を編成中のため、確定したコメントではないが、エネルギー需要が大きいというトレンドは続いており、受注についても非常に強いものとみている。

Q： 今年度のエネの収益性について、期初見通しの営業利益率 6.3%から、2Q 見通しで 3.0%に下げ、今回見通しが 1.6%となった。安定的な収益基盤でないように見えるが、今後 1 年間ほどで、どの程度の収益性を考えているか？

A： エネは、足が長い事業のため、短期的な改善という観点での回答は難しい。今、足元で悪化しているのは、2Q 以来説明をしている海外事業であり、止血するための構造改革を進めている。その他の原動機、原子力、カーボンソリューション事業における国内事業は非常に好調であり、これが完了すれば、収益性は回復してくる。来年度の利益水準については、現在検討中であり回答できないが、これらはアセットを多く持たない収益性・効率性が高い事業と考えている。成長分野である原子力もあり、領域全体としては、3 年～5 年にかけて、営業利益率 10%を超えると見込んでいる。

<質問者 5>

Q： 3Q ではエネで約 50 億円の下振れが発生したが、構造改革費用 100 億円のうち 50 億円を使うことで、3Q はインラインとなり、通期ではまだ構造改革費用が 50 億円残っていると理解してよいか？

A： 構造改革費用として持っていたものを、3Q でエネに振り当てた。残り 50 億円あるが、来年度の新中期経営計画が始まる時には、できるだけ足を引っ張るものがないように、費用を充当しながら構造改革を徹底して進めていく。

Q： エネの営業利益見通しを 60 億円に引き下げているが、構造改革と合わせると今回の見通し悪化は 50 億円か？また海外子会社の赤字も来期はなくなるということで、来期の利益数字としてはこの百数十億円が戻る水準と考えてよいか。

A： 来年の利益水準はお答えすることは難しいが、来年度以降、先ほど申しあげた利益水準を目指して回復していくと考えている。

Q： 原子力について、先週、原発部品への設備投資という新聞記事が出ていたが、その事実確認をしたい。設備投資により、原子力の将来的な売上に寄与して、中計の売上水準に対して、プラスの影響が出てくるか？

A： 概ねその理解でよい。設備投資するということは、しっかりと利益を出していくということ。データセンター関連などもあり、エネルギー需要が高まっている中で、原子力が果たす役割については、日本のみならずグローバルでも大きい。我々は技術力を用いて、需要を追い風に原子力事業を伸ばしていく。

以上